

13歳
エリー

13歳になる自分を迎えに来た車が立ち去るのを、2階の窓から見ている絵梨華。華奢なわりに大きな胸の前で腕を組み、壁に寄りかかる。ゆるくウェーブのかかった赤茶色の髪は、肩甲骨をおおっている。吊り上った目は鋭く、かわいいというより美人といえた。

階段を駆け上がる音に続き、扉を激しく叩く音が聞こえる。

「絵梨華、車は行ってしまったわ。でも送ってあげる。だから大丈夫、お母さんに任せたらいいのよ。お願い、部屋に入れてちょうだい」

「嫌よ。寮になんて絶対入らない！」

「寮に入ってきちんと3年間工場勤めを終えれば、保護区で働く資格が得られるのよ。たった3年じゃない」

「3年も拘束されるのよ」

「そんな分からないこと言わないで。何が気に入らないの？」

「わたしは保護区になんていかない。習慣に縛られて集団で暮らすなんてうんざりよ。自由区で自由にいきたいのよ。だから保護区になんて入れなくたって構わない」

「でも卒寮証明書がなければ、自由区で仕事を探すのだって厳しいわ」

「証明なんて関係ない。自分の力でやり抜くわ。もう放っておいてよ！」

「放ってなんておけるわけじゃない。将来困っても逃げ込む先がないのよ」

「将来のことなんてどうだっていいのよ。いつ死ぬのか分からないのに！」と言いながら、扉を蹴り続ける絵梨華。

「やめなさい絵梨華！」と母親が叫ぶ。声に呼応するように扉が開いて、絵梨華が出てくる。

「分かってくれたのね！」

母親が絵梨華に駆け寄り、抱きしめようとする。舌打ちする絵梨華。母親を突き飛ばし、階段を駆け下りる。

「待って、絵梨華～！」

絵梨華が玄関を飛び出し、町の中に消えていく。

ジンは、40代にしては若く、引き締まった体格をしている。面長の顔に、切れ長の目。純和風の顔立ちは、どちらかと言えば柔和で人当たりがよい。白髪交じりの黒髪を束ねて、一つで結んでいる。

ジンの後ろには、10代の青年エイキと60代の男ヨシが控えている。

3月下旬にしては寒く、ヨシがジンに春物のコートを羽織らせた。

店の裏口の扉を開けるエイキ。しかし、扉は開かない。

「扉一つ開けられないのか！」とヨシがエイキを叱りつける。

「すみません。見てきます」と走り出すエイキ。

しばらくするとズルズルと重いものを引きずる音がして、扉が開く。

外に踏み出すジン。足元には、直角に固まった男の死体が転がっている。

死体は下着しか着てなかった。パンツからはみ出した手足はガリガリにやせ細り、薄汚れていた。

「すぐに片付けます。いってらっしゃいませ」と最敬礼するエイキ。

うなずき、歩き去るジン。

「ヨシさん、手伝ってください」

脇に手を入れ、上半身を持ち上げるエイキ。ヨシが足を持ち上げ、ゴミ捨て場に死体を運ぶ。

エイキが死体を乱暴に投げ捨てる。

「無法地帯ではいつ仕事を失うか分からない。明日は我が身だ。もっと丁寧に扱え」

「死んだ奴に感覚なんてありませんよ。踏まれたって、蹴られたって平気なもんです」

エイキが男の死体を蹴飛ばす。止めるヨシ。

「死んだこともないのに、どうしてわかる！」

手を合わせて、拝むヨシ。ヨシに背を向け、舌を出すエイキ。

寒そうに体を丸めて、絵梨華が交番の前を通りかかる。警察官が飛び出てきて、絵梨華の腕をつかむ。

「君、ひとり。大人はどうしたの？」

「離して！」と絵梨華が身をよじって抵抗する。

「子どもが一人で自由区を歩けないことは知っているよね？ 特にこの時期、入寮を拒んで町を徘徊する子どもがたまにいるんだ。君もそうじゃないの？」

「違います。パパを待っているんです」

「嘘をついてはいけないよ」

「本当です」

「それなら、個人番号を言いなさい」

「.....」

返事に窮して警察官を睨みつける絵梨華の肩をジンがつかむ。

「待たせたね。行こうか」

驚き、振り返る絵梨華。警察官が絵梨華とジンの間に割って入る。

「今この子すごく驚いていた。本当にお父さんなんですか？」

警察官を押しやり、絵梨華がジンに飛びつく。

「パパ、どこに行っていたの？ 探したのよ～」

「ちょっと仕事の電話に出てたんだ。はぐれてしまって悪かったな」

「親子だって証明できますか？ 個人番号を教えてください」と警察官がジンに詰め寄る。

「わたしは無法地帯の人間なんだ。証明するものは今は何もないよ」とジンが両手を上げる。

「娘のわたしがパパだと言っているのだから、もういいじゃない。行きましょう。お腹すいちゃった」とジンの腕をつかみ歩き出す。ジンが、近くの喫茶店を指さす。うなずく絵梨華。引き下がる警察官。

席に着くと、ジンが絵梨華にメニューを差し出す。

「なんでも好きなものを注文しなさい」

カロリー表示を調べながら、サラダとパンと紅茶を注文する絵梨華。テーブルに並んだ料理を一口ずつよく噛んで飲み込んでいく。

コーヒーを飲みながら、黙って食べる様子を見守るジン。

サラダとパンを食べ終えた絵梨華が、無糖の紅茶をすする。

「気づいているかもしれないけど、わたし今年で13歳なんだ」

「入寮から逃げてきたの？」

「迎えの車が去った後、家を飛び出して来たんだけど、どこに行っても呼び止められて……」

「おじさんは、さっきも言ったけど無法地帯の人で、店を経営しているんだ。子探しはもう終わっているから、うちの店で働いても問題ない。ついてくるか？」

「いいの？」と申し出に飛びつく絵梨華。

鞆から書類とボールペンを取り出すジン。

「生活に必要なものはこちらで用意する。ある程度は要望を聞き入れることができる。しかし掛かった費用はすべて借金になる。一度雇えば、借金が清算されるまで自由はない。生活ぶりにもよるがおよそ3年は店から外に出られない。それでもいいなら、この契約書に署名して、母印を押しなさい」

ひたたくるように奪い取り、署名をし、母印を押す絵梨華。

「絵梨華か。いい名前だ。店でもその名前で名乗るといい。でも、うちの店の人間はカタカナが多いんだ。君もこれからカタカナでエリカと言いなさい」

「どっちでもいいわ。ところで何の店……ううん、なんでもない。行きましょう」

何かを決意したかのように黙り込んだエリカが、残りの無糖紅茶を飲み干し立ち上がる。

喫茶店を出たエリカは、ジンの後を30分ほど黙って歩き続けた。住宅街を抜けて、買い物ゾーンが広がる駅前の繁華街を抜けると、駅裏に出た。古びたビルが立ち並び、昼間なのに薄暗かった。

「車に乗らないの？」とエリカがジンに訪ねた。

「歩くのが好きなんだ。嫌いかな？」

「嫌いじゃないけど、まだ遠いの？」

「いや、もう見えている。エリカは今日からここに住む」とレンガ造りの6階建の古いビルを指さした。

「ここはもう無法地帯なの？」

「グレーゾーンだね。自由区の一部だが、無法地帯で働く人間が多く住んでいる」

「どうして無法地帯に住まないの？」

「できるだけ店で埋めたいからさ。さあ、入って」

ジンがビルの扉を開けると、ヨシが立っていた。

「ジンさん、お帰りなさい。この子ですね」

「ああ、よろしく頼むよ。わたしは店に戻る」

ヨシにエリカを引き渡し、立ち去るジン。

建物の中に入ると、食堂が広がっていた。20畳ほどのスペースには、こげ茶色のパイプ椅子と机が並んでいて、ひどく殺風景だった。8人ほどの女たちが、好きな場所に座り、好きなことをしていた。エリカに注意を払うものはいなかった。

「ここには上下関係はない。一人一人が自分で決める権利を持っている。他人のことには干渉しないし、干渉させない」とヨシが説明した。

「いいわね。そういうの好きよ」とエリカが答えた。

「部屋に案内する。ついてきなさい」

食堂を抜け、一階の奥の日の当たらない場所に連れて行かれるエリカ。扉をノックし、入っていくヨシ。

「ここが一番安い部屋だ。同室者もいるから、さらに値引きになる。ここから始めるといい」とエリカを部屋に招き入れるヨシ。

エリカが8畳ほどの部屋の中を見回すと、薄汚れた薄っぺらな布団の上に小太りな30代前半くらいの女が座ってドレスにアイロンをあてていた。女は立ち上がり、エリカに近づいた。

「わたしはマミ。二人になれば安くなるわ。あなたのこと歓迎するわ！」とエリカに手を差し出すマミ。

マミを無視して、部屋を観察するエリカ。布団の周りには段ボール箱が積み上げられ、一番上の箱からしわになったドレスや下着があふれ出ていた。

「わたしのこと無視するつもり？ あなた名前は？」とエリカの肩をつかむマミ。

手を振り払い、マミを見返すエリカ。マミは、服のサイズが合っておらず、ピチピチでおかしなところにしわが寄っている。

「貧乏くさい女ね。わたしあなたのこと嫌い」

「わたしは嫌われても構わないわ。部屋代が安くなればいいのよ」

「こんなしみつたれた部屋には住めないわ。一人で使えるもっと広い部屋はないの？」とヨシに要求する。

「あることはあるけど、借金が増えるぞ。やめておきなさい」

「借金がなによ。返せばいいのだもの、先に借りられるだけ借りなければ損じゃない」

「エリカ、そんな考え方ではここから一生出られなくなるぞ」とヨシがエリカをたしなめる。

「そうよ。少しでも貯めておかなくちゃ、外に出たとき大変よ！」とヨシの味方につくマミ。

「うるさいわね。わたしがいいと言っているのだから、言うとおりにすればいいのよ」と部屋から出ていくエリカ。

「待ちなさい。勝手に歩き回ってはいけない」と後を追うヨシ。

一人残されたマミは、「面白い女が来たものね」とつぶやき、また布団に戻ってアイロンをかけた。

エリカは、エレベーターの上昇ボタンを押した。しかし反応はなかった。非常口を開け、階段を上り始めた。

「エリカ、止まりなさい」階下からヨシの声が響いた。

エリカは、声を無視して最上階まで上った。非常口の扉に手をかけるとピーピーと警告音が鳴り響いた。追いついたヨシが、「だから言っただろう。勝手に触ってはいけない」と言いながらポケットからカードキーを取り出し非常口に掲げた。警告音は止まり、カチツという音がした。

非常口をくぐると広く長い廊下が見えた。エレベーターの先には、扉が二つあった。奥の部屋は広く、4分の3ほどを占めていた。手前の部屋は狭いが、こげ茶色の重厚な扉が高級そうだった。

「誰か住んでいるの？」とエリカが聞いた。

「奥はジンさんの部屋だ。許可なく入れない」

「手前の狭い方は？」

「今は誰も住んでいない。見たいなら見せてやろう。だが見ればみじめになるだけだぞ」とカードキーで扉を開けるヨシ。エリカは、玄関をくぐった。

扉の内側は別世界だった。大きな白い下駄箱の扉には、全身が写る鏡がついていた。

エリカは、吸い寄せられるように部屋に上がった。そしてすべての扉を開いて回った。

廊下の左側には寝室があった。こげ茶色の幾何学模様の壁に、ピカピカ光るフローリングの床。ピンクと白の天蓋つきベッドの奥には、5畳ほどのウォークインクローゼットがあった。

廊下の右側にはトイレと風呂場が並んでいた。風呂場は、クリーム色の大理石でできていた。洗面台も広く、大きな鏡がついていた。

廊下の突きあたりは、キッチンとダイニングとリビングがあった。ピンクとこげ茶と白でまと

められた部屋は、ふかふかしていて、見るからに高級そうだった。

エリカは、一目でこの部屋が気に入った。

「わたし、この部屋に住みたい。いいえ、絶対に住む」とエリカはヨシに宣言した。

「バカなことを言うな。部屋代だけで月に30万はかかるんだ。まだ働き始めてもいないエリカに手の届く部屋じゃない。さあ、分かったら出なさい」

「なによ。稼げば問題ないでしょ」とピンクのソファに座り込むエリカ。

「そんなのジンさんが許すはずがない。さあ、立ちなさい」とエリカの腕をつかんで立たせようとするヨシ。ヨシから身をかわして、ソファにうつ伏せに寝そべるエリカ。

「疲れたから寝るわ。起きたら食事を運んでちょうだい。そうね、ハムサンドと無糖の紅茶がいいわ」とエリカが目を閉じる。

「ここで一瞬でも眠ったら30万が課金されるぞ。起きなさい」とヨシがエリカを起こそうとする。

「いやよ。わたしの部屋になるんだから」とエリカが体を丸めて抵抗する。

「あきれた娘だ。勝手にするがいい。後悔しても知らないぞ」と部屋を出ていくヨシ。

エリカが目覚めると、テーブルの上にハムサンドと紙パック入りの無糖紅茶が置いてあった。起き上がり、食べ始めるエリカ。ふと見上げると窓際にジンが立っていた。

「そのハムサンドと無糖紅茶はおごりだ。課金はしない」とジンが背を向けたまま話す。

「そりゃどうも」

ハムサンドを食べ終えたエリカが、ビニール袋からストローを取り出し、パックの無糖紅茶を飲んだ。

「ここに住むなら、毎月100万は稼がなくては厳しいだろう。月に28日働くとすると、一日平均3万6千円は欲しい。それでも住むか？」とジンが訪ねた。

「ええ、わたしはこの部屋に住む」と食べながらエリカが答えた。

「稼ぎが悪くて、連続して借金が増えれば、他の店に売り払う。それでも文句はないな」とエリカの隣に座りながら、ジンが念を押した。

「もちろん。そんなことにはならないけど」と食べ終えたエリカが、ジンを見返した。

「仕事は簡単だ。どんな方法を使ってもいい。客からなるべく多くの金を引き出すことだ。場所や食べ物など必要なものは店が用意する。エリカは、なるべく多くを利用して、さらに客からサービス料を取る。売上の10%とサービス料がエリカの収入になる。できるか？」

「できるわ」

「指名を勝ち取るために客と寝る女もいるが、江戸時代とは違う。一度契りをかわした相手とずっとつき合い続ける義務はない。二度目を勝ち取るためには、よほどの魅力がなければ難しいだろう」

「寝るってセックスのこと？ そんなことしなくてもナンバー1になってみせるわ」

「飲食だけで100万稼ぐのは厳しい。借金が払えなくなって他の店に売られれば、セックスだけが仕事になるんだ。売り惜しみするな。安売りもするな。なるべく大勢に気を持たせて、最高に値

を吊り上げて売りつける。そしてそいつを固定客に持ち込むんだ」

「忠告ありがとう。でもわたしはわたしのやり方でやる。無用な心配はしないで。わたしのために破滅してもいい男をつかまえてみせるわ」

「いいだろう。今後は忠告しない。そのかわり、稼ぎが悪ければ遠慮なく売り払う」

エリカに手を差し出すジン。ジンの手を包み、しっかりと握りしめるエリカ。

「交渉成立だ。この部屋はエリカのものだ。今夜から店に出ろ」

「服と化粧品を用意して。いくら課金されても構わないから最高級のを」

「いいだろう。ヨシに3時間以内に届けさせる。前日なら1000円でいいが、当日だからサービス料を弾んでやれ。品物代とは別に3000円つけておこう」

「希望が通るならなんでも構わないわ」

「服は着たままでいい。採寸するから立ちなさい」とポケットからメジャーを取り出しながらジンが言う。

「可能な限り体に合った服が欲しいわ」と言いながら、服を脱ぎ始めるエリカ。上下お揃いの白い下着姿になる。ブラジャーを外して、パンティー一枚になるとジンの前に立ち、両手を肩の高さで広げた。あらわになった大きな胸は、丸く白く柔らかそうだった。細く折れそうな腰に、引き締まった腹部、手足も長く、細く、白かった。

挑むように微笑むエリカ。

エリカの体に手を回し、少しも顔色を変えずに採寸するジン。

一瞬落胆の色を見せたが、すぐに無表情に戻り、黙って採寸されるエリカ。

部屋着姿のエリカが、白い肌が引き立つようにうっすらと化粧を施す。そして、真新しい淡いピンクのドレスに着替える。胸元が強調され、長いスリットが入ったタイトなロングドレスは、体のラインを美しく浮かび上がらせていた。

インターフォンが鳴る。

「誰？ なんか用？」とエリカが訪ねた。

「俺はエイキ。お前を店に案内するように頼まれた。生意気な新人、支度はできているだろうな」と怒ったようにインターフォン越しにエイキが答えた。

エリカが、化粧品を鞆につめて、玄関前に立つ。濃いピンクのヒールを履き、玄関を開ける。腕組みをしたエイキが、つま先から頭の天辺まで、ゆっくりとエリカを眺める。エイキの顔から怒りが消え、微笑に変わる。

エリカは、エイキの前で、ゆっくりターンした。

スリットが広がり、黒いガーターベルトと黒いストッキングの間の素足が、白く輝いた。

「完璧な仕上がりでしょう？」

エイキが、反射的にうなずいて、ハツとする。

「外は寒い。コートを着た方がいい」とエイキが、エリカに忠告する。

「バカじゃないの。移動は絶好の宣伝よ。隠してどうするの！」

カードキーで玄関に施錠したエリカが、ヒールを響かせ歩き出す。後に続くエイキ。

エリカが歩くたびに、通行人が振り返った。どこの店の女の子なのかエイキに訪ねる男も数名いた。

「今日は初日だから、いろんな客に挨拶に呼ばれるだろう。気に入られれば、そのまま接待してもいい」とエイキが、エリカに説明した。

「1階にマミって女がいるでしょう？」

「マミさんは、この店の人気ナンバー1だ。少額の客も大切にすることで、不動の地位を築いている」

「あんな貧乏くさい女が？」

「マミさんは、ドレスや下着のレンタルをしているんだ。ナンバー1の上に副業もあるから、相当金を貯めこんでいるという噂だ。エリカも見習うといい」

「見習うなんて、絶対ありえない」

「いいかエリカ、13歳になる子どもが入店すること自体は珍しくない。毎年必ず1人以上入る。それでも新顔は興味を持たれるから挨拶には呼ばれるだろう。でも、挨拶だけでは1000円ももらえるだけだ。接待しなければサービス料はもらえない。売上も出ない」

「そんなこと、言われなくても分かっているわ。余計なお世話よ」

「いいや、分かっている。接待になれば、客のことをよく知っている熟練したスキルを持つ大人の方が圧倒的に有利なんだ。座興で子どもを呼んで、大人に接待させる。そんな流れが出来

上がっている。そこに切り込むのだから、なかなか厳しい」

「わたしはわたしのやり方でやるのだから、口出ししないで」と立ち止り、エリカが怒鳴った。

「俺はエリカを心配して言っているのに！」とエイキが怒鳴り返した。

「店先で何をしている」とヨシが、店の玄関から飛び出してエリカとエイキの間に入った。

「ここが店なの？」

エリカが辺りを見回した。ピカピカ光る赤い壁の中央に、金属で出来た黒い玄関があった。

「看板もなにもないのね」

「完全個室の予約制だからな」とヨシがエリカに答え、店内に引き入れた。

エイキに連れられ、エリカが待合室に入る。

15人の出番待ちの女たちが、10畳ほどの待合室にひしめいていた。

「雑誌も飲み物も、ここにあるものは好きに使っていい。30分単位で利用料が課金されているから」とエイキがエリカに説明した。

「つまり、待っている時間が長ければ長いほど借金が増えていくわけね」

「そういうことだ」

空いている椅子にエリカが座ろうとすると、男が顔を出し、声を掛けた。

「エリカさん、5番の部屋に挨拶にいらっしゃいます。ついてきてください。案内します」

鏡の前で整え、後に続くエリカ。

エリカが5番の部屋に入ると、男と女が1対1で酒を飲んでいて、テーブルには唐揚げなどの食べ物が並び、4畳ほどの個室には酒と油の匂いが充満していた。

「呼んでいただいてありがとうございます。エリカです」

エリカが、ちょこんと形だけ頭を下げる。

「君がエリカか。なかなかかわいらしい。こっちに来て一緒に食べなさい」

男の隣に座るエリカ。しかし、食べ物には手をつけない。

「遠慮することはない。好きなだけ食べなさい」

「わたしは決めた時間に決めたものしか食べない。いらないわ。太るし」

「客であるわたしのすすめを断るのか！」と顔を赤くして男が言った。

「こんな失礼な子、早く追い出しましょう」と唇を歪めて女が言った。

「わたしは、わたしのために破滅してもいい男を探しているの。残念ながらあなたは違うみたいね。失礼するわ」とエリカが部屋を出て行った。

「俺は挨拶料など払わないからな！」と男が閉まった扉に怒鳴りつけた。

それから数件挨拶に呼ばれたが、どこも同じ調子で追い返された。呼び出しが途切れ、待合室に戻ったエリカは、ファッション雑誌を読み始めた。するとヨシが表れ、エリカを叱った。

「どういうつもりだエリカ！ 客を値踏みするとは何事だ！」

「1000円ずつちまちま稼ぐなんてばからしいわ。わたしを気に入って100万出してくれる男を見つ

ける方がずっといい」

「初対面の小娘にポンと100万くれる人間がいるわけないだろう」

「いるわよ。つかまえてみせる」

雑誌から目を離さず、口答えするエリカ。

「そんな考えじゃ、借金が増えるばかりだ。踏み倒されてはかなわないから、毎日清算してもらおう。今日中に5万稼いでみせろ。そしたら何にも言わない」と挑発するようにヨシが言った。

男が現れ、エリカを呼んだ。

「それで黙らせることができるならいいわ。5万くらい簡単よ」と答え、エリカが待合室を後にした。

エリカが案内された部屋は10畳ほどの和室で、男一人に大人の女が5人ついていて、男のすぐ隣には、マミがいた。

「キンさん、エリカは最上階を選んだんですよ」とマミが口火を切った。

「ほお、それなのに飲み食いを断っているそうだね。確かに、気の強そうな顔をしている。しかしなかなかの美人じゃないか」とキンが酒を飲み干しながら言った。

「わたしは、わたし一人に夢中になってくれる男を探しているの。ここには必要ないみたい」とエリカが出ていこうとする。

「まあ待ちなさい。最上階に住むとなったら、月に100万は欲しいだろう。しかし、わたしはロリコンじゃないんだ。君の体に興味はない」とキンが腕組みをして考え出した。

マミが、キンの耳に口を寄せてささやいた。

「エリカは、人に指図されるのが何より嫌いなのよ。ヨシさんやジンさんの反対を押し切って最上階を借りたくらいなもの。だからエリカに何でも命令できる権利を買ってはいかが？」

キンは、マミの囁きを面白がり、声を立てて笑った。

「そいつは面白い。金とプライド、どちらを取るか選ばせるわけか。いいだろう。君を自由にする権利を買おう。いくら欲しい？」

「わたしはお金で自由にならないわ」

「今はそういえるだろうな。しかし支払いを迫られたらどうなる。そんな強情な態度では、毎日決算するように求められたらどうだろう。ヨシは金に厳しい、1円だって待ってはくれまい」

「今日中に5万くらい楽に稼いでみせるわ」

「エリカに何を命じるか、考える楽しみが増えたよ。マミのおかげだ」

微笑みあうマミとキン。

眉を吊り上げ部屋を出ていくエリカ。

閉店の時間が近づき、ヨシがエリカに清算を求めた。

「あと3万足りない。どうするつもりだ！」

「明日、今日分も稼ぐからそれでいいでしょう！」

「今日稼げなかったものが、明日稼げるはずがないだろう。いい加減に目を覚ませ」

「あなたじゃ話にならない。ジンさんと呼んでよ」

するとジンが待合室に現れる。

「今日中に残り3万払えなかったら、君を売り払う」

「連続して借金したらって言ったじゃない！」

「わたしの見込み違いだった。エリカには客商売の才能がない。待つだけ無駄だ」

「どうしても今日3万払わないとだめなの？」と懇願するエリカ。

「同じことは二度言わない」と言い、黙り込むジン。

「……キンっていう客はまだいるの？」とエリカがヨシに訪ねた。

「マミさんの客ならまだいる。どうするつもりだ」とヨシが怪しんだ。

決意したように待合室から出ていくエリカ。

エリカが、部屋の前で立ちつくし、ノックをためらう。すると扉が開いて、中からマミが出てくる。

「来たわよ。キンさん」とマミが振り返り叫ぶ。

「わたしは別に……」とエリカが反論しようとする。

「さあ、入って。いくら足りないの？」

マミが、エリカを無理矢理引っ張り込む。料理の並んだテーブルの前に座らされるエリカ。

キンが酒を飲み干し、ゆっくりとエリカに語りかける。

「子どもに酒を飲ませても面白くない。だから食べてもらうことにした。ここにある料理を君が全部食べたなら、支払いに足りない額をわたしが払ってあげよう。さあ、食べなさい」

エリカが、膝の上で手を握り締め、悔しさに耐える。その様子をじっと見守るキンとマミと女たち。

テーブルの料理を見回すエリカ。ピザに唐揚げ、パスタなど高カロリーで味の濃いものばかり並んでいる。どの料理も出来たてらしく、ホカホカと蒸気を立ち上らせていた。

「閉店まで時間がないわ。早く食べ始めなさい」とマミがエリカにフォークを握らせた。

エリカが、震える手で唐揚げを突き刺し、噛み砕き、飲み込む。一度口にすると火がついたように次々と威勢よく飲み込み始める。大人たちが歓声を上げてはやしたてる。

部屋に戻ると、トイレに駆け込み、口に手を入れ吐き始めるエリカ。悔し涙を流す。何も吐けなくなると、玄関ドアに耳をつけて座り込む。コツコツと足音が聞こえる。立ち上がり、扉を勢いよく開けると、ジンが立っていた。

エリカの右手の手の甲にできた歯形を見るジン。

「吐きだこをつくるな。吐くくらいなら走れ」と言い残して、ジンが隣の部屋に消える。

「分かっているわよ！」とエリカが、ジンの部屋の扉を蹴飛ばし叫ぶ。

翌日の早朝、ジンが窓を開けると、ジャージ姿で全力疾走するエリカの姿が見えた。

夕方になると昨日とは違うドレスに身を包んだエリカが、店への道のりを一人で歩いていた。

通りがかる人に、女優のような堂々とした歩き方で自分をアピールして、多くの男たちを振り向かせていた。

客に挨拶に呼ばれると、自分から料理や飲み物をねだるようになった。

今まで禁じていた分、何を食べても新鮮に感じられた。底なしの食欲を満たそうと食べれば食べるほど、客は面白がった。そして売り上げも上がった。

その様子を確認したヨシは、日ごとの清算を要求しなくなった。

しかし、ドレスや化粧品など、エリカが高価な買い物ばかりしたため、売上より支払の方が38万上回り、月末の取立で再び窮地に立たせれることになった。

エリカは、最上階の自分の部屋にヨシを呼んで支払いを待ってくれるように頼んだ。

「お願い。来月は買い物を控えて、たくさん働くから、ひと月だけ待ってちょうだい」

「入店直後は珍しいから客もつくが、翌月には挨拶に呼ばれる機会は減る。今月以上の売上は期待できない」

「どうすればいいの？」

「マミさんが、お前の借金を肩代わりしてもいいと言っている」

「ほんとに!？」

「ただし、条件がある。ここから1階に移って、マミさんのドレスレンタルの仕事を手伝うんだ」

「それだけではできない。この部屋があるから頑張れるのだもの」

「それじゃ話にならない。今日中に何とかするか、売られるかだ」

「マミさんはどこにいるの？」

「1階の自分の部屋で仕事をしている。会ってくるといい」

エリカが1階のマミの部屋を訪ねると、相変わらず布団の上でアイロンをかけていた。

「今から、このアイロンかけはエリカの仕事になる。ここに座りなさい」とアイロンを置きながらマミがエリカに言った。

「仕事は手伝う。でも最上階から降りたくない」

「借金をしている間は、本当の自由はない。自分のお金を持つことで初めて手に入る選択肢もある」

「でも死んでしまったら何にもならないわ。わたしは今欲しいのよ！」

「そんなに簡単に死ねるもんじゃない。だから苦しむじゃないか。やりたい放題やって逃げ切ろうなんて甘いんだよ。これが最後の警告だ。あの部屋から降りなさい。そして、ここに住んでわたしを手伝いなさい。わかったら今すぐここに座って、アイロンをかけて。教えてやるから」

マミに引きずられ、アイロンの前に座らされるエリカ。しゅしゅアイロンに手を伸ばすが、手を引っ込めてしまう。

「生き抜く覚悟を決めるんだ。さあ、持ちなさい」

エリカがアイロンを持つと、マミが手を添え、教え始める。

黙って受け入れるエリカの頬を一筋の涙がこぼれ落ちる。

33歳になったエリカは、よく食べ、よく飲んだため、走っていてもかなりふくよかに変わっている。それでも美しさは相変わらずで、多くの客を虜にしていた。

明日は、53歳になったマミが、目標金額を貯めたので、自由区へと出ていく日だ。

マミのドレスレンタルの仕事は、エリカが引き続くことになっていた。

布団の上でドレスにアイロンを掛けながら、エリカはマミが現れるのを待った。

「あなたも、後継者を見つけるといわ」と言いながら、マミが部屋に戻ってきた。

「明日からは一人なのね」とアイロンから手を離し、マミの手を取りながらエリカが言った。

「最初の反抗的な態度が嘘のように、いい女になったわね。お金もだいぶたまったんじゃないの？ あなたが出ていく日も近いわね」

「マミさんがいなかったら、わたしはどうなっていたか分からない。今思うと自分のバカさ加減にぞっとする」

「この町に来る子どもは反抗的な子が多い。エリカはその中でも飛びぬけていたけど、だからこそ後継者にしようと思ったんだから、悪いことばかりじゃないわ」

「先のことなんて考えたことなかったけれど、マミさんと別れる日があるなんて」

「死んだわけじゃないもの。エリカがお金を持って自由区に戻ってくればまた会えるわ」

「そうね。死別とは違うもの、永遠の別れてわけじゃない。でも怖いよ。昔から自分が死ぬのが怖かったけれど、今は周囲の人の死まで恐ろしい」

「どうしたの。そんな弱気になるなんてエリカらしくない」

エリカを抱き寄せ、優しく肩をなでるマミ。エリカが肩を震わせ涙を流す。

「誰にも負けたくなくて、無我夢中で働いていた時は良かった。借金を返すことだけ考えればよかった。でも、お金に余裕ができて、本当の意味で自由に選べるようになったら、急に先の長さが恐ろしくなったの。突然終わりは来ないけど、終わりになるまでは生きていなくちゃならない。そして、生きていくためにはお金が必要。でもいつまで生きるか分からない以上、いくら必要かも分からない。今になって母が言っていた保証のない暮らしの怖さがよく分かったわ」

「そうね。それでも働き続けるつもりでいれば、何とかなるものよ」

「そうかもしれない。でも、死んだらどうなるの？ 本当に死後の世界があるの？ それともまた生まれ変わって同じ過ちを繰り返してしまうの？」

「それは誰にも分からない。分からないけど」

エリカの瞳をじっと見つめるマミ。その表情は母親のように柔らかく、優しく、愛情にあふれていた。

「おいしいものを食べて、きれいな服を着て、親しい人のそばにいる毎日は悪いものじゃない。それがいつまで続くかは分からない。でも、思い出は消えないわ。ずっと心に残っている」

「そうね。今が幸せだから死ぬのが怖いのかしら？」と首をかしげながらエリカが問う。

「そうかもしれないわね。失いたくないものができたから、怖いかもしれないわね」とマミが微笑み返す。

「幸せ色一色には染まらないのね」と照れたようにエリカが笑う。

手を取り合うエリカとマミ。

「さあ、仕事の時間よ。今夜はわたしたち二人の最後の晩よ。思いっきり贅沢しておいしいものを食べさせてもらいましょう」と言いながらマミが立ち上がる。

「ええ、もうちょっとでアイロンが終わるわ。さきに行ってて」とエリカが答えてアイロンを手取る。

一人に戻ったエリカは、静まり返った部屋を見回す。布団の周りに積み上げられた段ボールを見た。アイロンを握った手を見た。そして、布団に仰向けに寝転がり、思いっきり声を上げて泣いた。